

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 26 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370341

研究課題名(和文)現代カナダ西海岸文学：「多文化主義」、「人種主義」、「植民地主義」のポリティクス

研究課題名(英文) Racism, Colonialism, and the Politics of Multiculturalism in Contemporary West Coast Canadian Literature

研究代表者

戸田 由紀子 (TODA, YUKIKO)

椋山女学園大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40367636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：21世紀転換期以降カナダのマイノリティ文学が、それまでの被害者であることを伝える自伝的要素の強い伝統的移民物語から変化し、より実験的な手法を用いるようになった。多文化主義論争を踏まえて考えると、それは白人優位社会がより巧妙な形で維持されている社会構造に対して問題提起する必要性によるものだと考えられる。本研究は「多文化主義」政策がカナダのマイノリティ文学に与えた影響を踏まえながら、ウェイド・コンプトン、ラリッサ・ライ、マドレン・ティエン、イーデン・ロビンソンといった現在カナダ西海岸で活躍する作家たちの作品にみられる「人種主義」と「植民地主義」に抵抗する物語手法を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Post 21st century Canadian minority literature differs from traditional immigrant stories of victimization. Such change emerged, not because racial equality has been achieved, but to criticize racism that has become more covert and complex after the enactment of the Canadian Multicultural Act. My research examined the various experimental narrative strategies explored by Canadian minority literary writers including Wayde Compton, Larissa Lai, Madeleine Thien, and Eden Robinson. This research makes apparent how their works challenge the social framework set by the dominating class, and question the power structure that continues to maintain inequality, and by doing so, attempts to make apparent the politics of racism, colonialism, and multiculturalism.

研究分野：英語圏文学

キーワード：英語圏文学 現代カナダ西海岸文学 多文化主義 ポストコロニアル ラリッサ・ライ マドレン・ティエン ウェイド・コンプトン イーデン・ロビンソン

1. 研究開始当初の背景

北米マイノリティ文学研究は、アメリカでは1960年代の公民権運動、黒人運動、第二波フェミニズム運動によって、カナダでは1971年「多文化主義」政策が押し進められたことによって盛んに行われてきた。研究のアプローチの仕方は多様だが、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、そして階級による差別によって排除されてきた人々の主体的なアイデンティティがいかに表象されているかといった基本的な共通課題が見受けられる。研究代表者は、アメリカ黒人女性文学および北米アジア系文学に描かれる被抑圧者の経験が、どのように語られ(語りの技法)どのように表象されているかを中心に研究を進めてきた。

21世紀に入り、エスニック・マイノリティ作家たちの物語手法が変化した。被害者であることを伝える自伝的要素の強い伝統的移民物語ではなくなった。この変化について、国境や民族の境界線を超えて、「脱主体化」していると主張する批評家が多い。しかし現実にはさまざまな問題は続いており、作品を「脱政治的」と捉えてしまうと、解決すべき問題から目をそらしてしまうことになる。

カナダ西海岸はビジブル・マイノリティの比率が最も高く、多文化主義政策が難なく進んでいるという印象を受けるが、西海岸地域のアカデミアおよび文壇では、「多文化主義」は逆に差別に抵抗する場を奪い、本来の問題から目をそらす美辞麗句にしか過ぎない(Miki 1998, McCreary 2009, Weir 2013, Stewart 2013)という批判が強い。多民族が差別なく共存するというのは幻想に過ぎず、ネオリベラリズムが台頭する現代情報社会において、気づかない間に支配者側の特権が維持されるシステムに取り込まれてしまっているという見方(Dua 2005, Thobani 2010)が定着しているのだ。さらに作者と批評家のネットワークが密なカナダ西海岸では、多文化主義への批判が現代文学の作風に色濃く現れており、このような西海岸地域の状況を踏まえた上で、多文化主義政策と並行した非白人文学の変遷を追えば、物語手法の変化は、脱政治的というよりむしろ、白人優位社会がより巧妙な形で維持されている社会構造に対して問題提起をする必要性によるものだと考えずにはいられない。

従来の研究方法ではエスニック集団ごとに考察するため、地域ごとの状況は軽視し、民族における一般論としての議論になりやすい。そのため、より巧妙に隠された権力構造を暴くのが難しい。地域ごとの状況に着目し共時的かつ横断的に比較考察することで、現在マクロに働き続けている権力作用を明らかにしたい。そこで本研究では上記の西海岸地域での議論を踏まえながら、21世紀ビジブル・マイノリティと先住民作家によって書かれた作品が、どのように(1)社会構造の前提となってしまう白人中心主義に揺さ

ぶりをかけ、(2)不平等を生み出し、維持する権力構造に問題提起し、(3)植民地化や経済の動きと人種主義との深い関わりを浮き彫りにしているかを検証する。

2. 研究の目的

本研究は、「多文化主義」政策が現代カナダ西海岸文学に与えた影響を踏まえながら、現代カナダ西海岸の非白人(ビジブル・マイノリティおよび先住民)文学における「人種主義」と「植民地主義」に抵抗する物語手法および言語行為を明らかにすることを目的とする。21世紀転換期以降のカナダ西海岸の非白人文学が、従来の伝統的移民物語から変わったことに着目し、それがどのように支配者側の設定した枠組みに揺さぶりをかけ、不平等を維持するその権力構造に問題提起し、植民地化と経済の動きが人種主義と深く関わっているということを浮き彫りにしているかを検証する。

3. 研究の方法

具体的な研究方法は次の2点である。

- (1) 1970年代以降カナダで繰り広げられている「多文化主義」の議論をレビューし、カナダ西海岸における議論の位置づけを再確認する。
- (2) 21世紀カナダ西海岸のビジブル・マイノリティおよび先住民文学における「人種主義」と「植民地主義」に抵抗する実験的物語手法を、従来の自伝的物語と比較しながら考察することで、「多文化主義」「人種主義」「植民地主義」のポリティクスを明確にする。

4. 研究成果

現代カナダ西海岸文学における「多文化主義」「人種主義」「植民地主義」のポリティクスを明らかにするために、まず1970年代以降カナダ全土で繰り広げられている「多文化主義」の議論(Bibby 1990, Bissoondath 1994, Gwyn 1995, Granatstein 1998, Dua 2005など)をレビューし、カナダ西海岸における議論の位置づけを再確認した。その上で、21世紀カナダ西海岸のビジブル・マイノリティおよび先住民文学が、従来の伝統的移民物語/自伝的物語と、どのように異なるかを比較考察した。具体的には、カナダ西海岸を中心に活躍する黒人作家ウェイド・コンプトンの詩集、日系カナダ人作家ヒロミ・ゴトの小説および短編、中国系カナダ人作家ラリッサ・ライの小説、マレーシア系カナダ人作家マドレン・ティエンの短編、ハイスラ・ネーション作家イーデン・ロビンソンの小説を中心に考察した。そしてこれらの作品が「多文化主義」によってより見えにくくなっている不平等の権力作用をどのように可視化しているか、その物語手法とレトリックを分析することで、現代カナダ西海岸における「多文化主義」「人種主義」「植民地主義」のポリ

ティクスを明らかにした。

(1) 「多文化主義」の議論

カナダの西海岸の21世紀転換期以降の作品の変化は、カナダ西海岸の地域状況に大きく影響されている。カナダ西海岸は、人種や文化的差異による差別があるにもかかわらずその存在を見えなくするカラー・ブラインドというカナダ的リベラリズムが強く根付いている。カナダ西海岸は、香港返還前後に大量に移民してきた中国系移民を始めとし、ビジブル・マイノリティの比率が高い地域である。ブリティッシュコロンビア州のバンクーバー周辺は世界で最も住みやすい都市として紹介されることも多く、多様な文化的背景を持つ人々にやさしい場所であるという印象が一般的には持たれている。しかしその一方で、ビジブル・マイノリティに対する差別がなくなったわけではなく、むしろより巧妙な形で働くようになったと20世紀末から西海岸地域の研究者の間で批判されている。

スネラ・トバニ (Sunera Thobani) は「多文化主義」が一見平等を押し進めているようで、実は多様な文化的慣習を表面的にもてはやすことで、存在し続けるさまざまな不平等から目をそらし、差別に抵抗する場を奪い、本来の問題から目をそらしてしまうと批判している。トバニは、カナダの多文化主義政策がいわゆるデリダの言う「人種主義の最後の言葉」と同じように、その問題についてそれ以上語ることを抑止する力を働かせると指摘する。彼女はさまざまな形で続く人種差別に対して抵抗する場を多文化主義のリベラルな思想が奪ってしまったと指摘し、今や人種差別反対の言説や運動は、過激派として警戒されてしまうまでになってしまったとして多文化主義を批判する。またカナダが多文化主義と2言語/2文化を公式に主張することは、フランス系とイギリス系とは異なる文化の人々を区別することで白人優位主義をうまく継続する政策に過ぎないのだと説明する。マドレン・ティエン (Madeleine Thien) やライなど現在カナダで活躍する作家も同様に、人種について複雑に絡み合った問題を提起し、建設的に意見を交わし、それを展開する場が奪われてしまったと指摘し、「人種」について話すことがいかに難しくなったかを嘆いている。

カナダ西海岸文学はこのような状況を受けて、より巧妙な形で存続する人種主義に抵抗する言葉を探求するようになる。よって21世紀以降のカナダ西海岸マイノリティ文学作品に起こった変化は、より巧妙な形で維持されている白人優位の社会構造に対して問題提起するために起こったものだと考えられる。植民地の歴史が西海岸という地理的空間に、どのように積み重なって来たかを探求する系譜が1970年代以降のカナダ西海岸の主流文学 (Daphne Marlatt の *Steveston* や

Meredith Quartermain の *Vancouver Walking*) にみられるが、21世紀以降のマイノリティ文学はその系譜を引き継ぎつつも、主流社会のナラティブに取り込まれないように、クリエイティブで、「生産的」で、パフォーマンス的なものを手がけるようになった。白人優位の状況が解体されなければ根本的な不平等は解決されないというトバニと同様の主張が流れているのだ。

(2) ウェイド・コンプトンの『パフォーマンスの連帯』における人種主義に抵抗する言葉

ウェイド・コンプトン (Wayde Compton) は、バンクーバーで生まれ育ち、今でもバンクーバーを中心に活躍する詩人、評論家、ターンテーブルリスト (turntablist) として黒人史の研究者でもある。本研究ではウェイド・コンプトン (Wayde Compton) の詩集『パフォーマンスの連帯』 (*Performance Bond*, 2004) を取り上げ、このテキストが支配者側の設定した枠組みにどう揺さぶりをかけ、不平等を維持するその権力構造に対してどのような問題を投げかけているか、主流社会のディスコースに結果的に包摂されてしまう伝統的移民物語とは異なる作品をどのように展開しているかを考察した。そして従来の伝統的移民物語の主張にみられた本質主義に陥らずに、また、それと同時に、「ポストレイシャル」、「ハイブリディティ」、「多様性」、「多文化主義」という用語が促す脱政治化という落とし穴にも陥らずに、人種にまつわる問題をどのように展開しているかを明らかにした。

『パフォーマンスの連帯』というタイトルが示唆するように、この詩集はパフォーマンスを非常に重視した作品である。第1部の詩の一つである「パフォーマンス」は、CBC (カナダ大手テレビ局) で放映される際に、アーカイブ資料を集めたモンタージュ映像と合わせて朗読された詩である。第2部「(ボトル) (ポエムズ)」は、詩でありながらももとはアートオブジェであった。詩を巻物に書き、それを50本のボトルそれぞれに入れ、展示していた。第3部の「車輪の再発明」は、この詩の朗読を録音したレコードを他のレコードと組み合わせてターンテーブルで回しながら、新たな音楽を奏でるターンタビュリズム ("turntabulism") を実演するために書かれた。

この詩集に集録されている「車輪の再発明」という詩のタイトルは、「既に発明されていることを知らずに再び発明すること」を意味する。この詩では、「言葉」を、一度殺されるが蘇る古代エジプトの神オシリスの身体のようにと説明する箇所がある。しばらく埋もれていても時を経て復活し、復活することによって過去と現在を繋ぎ止めるオシリスのように、「言葉」も時空を超えて蘇り、生き続ける。切断され、さまざまなコンテク

ストの中で、異なる文脈の中で、異質な言葉や文化と出会い、新たな形で蘇る。コンプトンはこれを「言葉」の「パフォーマンス」と呼ぶ。

コンプトンは「車輪の再発明」の詩を録音したレコードをターンテーブルで回しながら、その音に合わせてこの詩をラップ調に朗読する。ターンテーブルリズムとは、ヒップホップ文化から派生したDJの表現方法で、従来のただレコードの曲を流すDJとは異なり、2枚以上のレコードをターンテーブルでスクラッチやビートジャグリングし、新たに独自の曲を生み出すパフォーマンスのことを指す。曲を自由自在に切断し、つなぎ合わせながらクリエイティブに新しいものを作り出すターンテーブルリズムそのもののパフォーマンスと、雑多な黒人文化や言葉を断片的に取り込み、つなぎ合わせるクリエイティブな表現方法と、2重の意味でパフォーマンス作品である。そしてパフォーマンスを通して過去と現在の人々との繋がりが、観客とアーティストとの間の繋がりが生まれ、パフォーマンスを通して「連帯」が生まれるのだ。

本稿では、コンプトンの『パフォーマンスの連帯』が、白人のナラティブに取り込まれずに、今も続く人種の問題を提起するために、従来の伝統的移民物語とは異なるクリエイティブで、生産的で、パフォーマンスなものを手がけていることを示した。コンプトンはブリティッシュコロンビア州の黒人/混血であることをパフォーマンスに表現することで、白人のナラティブに収斂されないナラティブを新たに編み出そうとする。オーセンティックな歴史を再構築することに重点を置くのではなく、パフォーマンスしながら自分を作り変えていくという未来に重点が置かれている。オーセンティックなアイデンティティが存在するわけではなく、過去の痕跡を残しつつもつねに変化し、作り上げていくものだという考え方は、コンプトンを始めとする21世紀転換期以降のマイノリティ作家にも手法は異なるにせよ見られる特徴であり、それは「主流社会が犯した過去の負の歴史」として既に解決されたものとして処理されてしまうことを拒む実験的な試みである。

(3) ラリッサ・ライの *Salt Fish Girl* における物語手法と主体表象

21世紀転換期以降のカナダのマイノリティ文学は、従来の被害者であることを訴えるリアリズムの手法で書かれた自伝的体験記から、より実験的で「パフォーマンス」なものへと変化した。単純に主流文化に対峙する民族的、人種的アイデンティティを主張するのではなく、主流社会によって個々のエスニック集団に付与されているアイデンティティの定義や表象そのものを問題提起し、「エスニックアイデンティティと文学作品との関係自体に問題を投げかける」(Ty 3) よう

になった。その例として、匂いや味覚など身体的感覚のモチーフと「変身/変異」のテーマを方法論として用い、特定の人種的立場から書いているということ認識しながらも、従来付与されてきた枠組や定義に収まらない主体表象を探求するラリッサ・ライの *Salt Fish Girl* とヒロミ・ゴトーの *The Kappa Child* があげられる。

興味深いことに、同じような時期に同じようなテーマやモチーフを扱ったものが多和田葉子の『犬婿入り』や川上弘美の『蛇を踏む』など日本の作品にみられる。これらの作品はどれも社会の周縁に位置するヒロインが、人間からカッパ、蛇、犬、魚など人間以外の生き物へ変身/変異する物語である。また、どれも古くから伝わる民話、神話のオリジナルな書き換えであり、とりわけ嗅覚、味覚、触覚などのモチーフを用いながら変身を描くという特徴を同じくする。

本論では、ラリッサ・ライの *Salt Fish Girl* と多和田葉子の『犬婿入り』に焦点を当て、「匂い」のモチーフと「変身」のテーマが、不利な立場に置かれている人々の存在を覆い隠そうとする社会構造に問題提起し、その存在が放つ「身体の叫び」(Lee 8)を表現し、既存の枠組に当てはまらないエージェンシーを提示する方法論として効果的に機能していることを明らかにした。主人公の身体が放つ「匂い」は、ヒロインの身体と精神の微妙な変化を捉え、主人公が周囲の人々とのように関わっているかを巧みに描き出すことで、現代社会が抱える問題を浮き彫りにしていることを示した。

(4) マドレン・ティエン *Dogs at the Perimeter* における「多文化主義」、「人種主義」、「植民地主義」

カナダでは1988年多文化政策の制定後、文化の盗用/流用、多文化政策、アフーマティブ・アクションに対するさまざまな論争が繰り広げられてきた。作者の生まれ育った土地とは関係のない場所を舞台に展開する物語を繰り広げることを「文化の流用」と捉え、それに否定的な立場を取るポストコロニアル文学やマイノリティ文学の作家や研究者は少なくない。自分とは異なる文化的背景の世界を描くことは倫理的にも非常にセンシティブな問題となってきた。

このような動向の中、マレーシア系カナダ移民であるマドレン・ティエンが *Dogs at the Perimeter* (DP) で、カンボジア系カナダ難民と日系カナダ移民を主人公として描いていることは興味深い。そこでマドレン・ティエンの作品分析では、カナダの多文化主義政策とそれに対するマイノリティ側の批判を経て変化していったカナダ文学のなかで、ティエンのDPをその中でどのような位置づけることができるかを考察した。マイノリティであるからこそ誰も気がつかないカナダ社会の側面に光を当てることができるという強

みを持っている、と作者ティエンが説明するように、DPは同じカナダに住んでいながら注目をされていない存在であるカンボジア難民を描き出す。作家 Nisi Shawl が指摘するように、「他者」を間違えて表象してしまうことを恐れるよりも、「省略」して「無視」することの方がより大きな過ちだということだ。DPは伝統的移民物語によくみられる自己主張型の物語ではなく、他者理解を促す移民物語であり、さまざまなレベルで複雑に入り組んでいる現代のカナダ社会の有り様への理解を促す作品だといえる。

本稿では、DPの「他者」の描き方が、人種について語る事が難しくなった 1994 年以降のマイノリティ文学が抱える問題を打破する実験的手法であることを示したい。「自己」と「他者」の接点に着目し、両者間の線引きをゆるがし、グローバルな問題をマイノリティの視点から捉える DP は、レイシャルポリティクスに対する攻撃を回避しつつそれを展開する。「他者」を描くことで、「自己」をより大きな関係性に置き、「自己」の範囲を拡大する。それによってピスンダスの指摘するマイノリティ文学の陥る「ゲットー化」に加え、ロイ・ミキの言う主流ナラティブに消費されてしまうことを回避することが可能となることを明らかにした。

(5)

イーデン・ロビンソンの *Monkey Beach* における植民地と寄宿学校制度の記憶

1970 年以降、同化主義から多文化主義へカナダ政府が政策を移行したことによって、先住民やマイノリティに対する関心が高まり、彼らが発する言葉（文学作品も含めて）への関心と需要が生まれた。その結果、先住民に対する数々の不当な扱いや第二次世界大戦時における日系カナダ人の強制収容など、国家の正史が「忘れようとしてきた」負の過去が明らかになり、国による正式謝罪へと至った。1988 年には日系カナダ人への正式謝罪が、そして 2008 年には先住民に対する正式謝罪があった。しかしアルコール・薬物中毒、自殺、DV、先住民女性の行方不明問題や殺害、性的虐待問題、貧困、教育の問題といった先住民は 500 年にわたるユーロカナディアンによる植民地化の歴史、とりわけ 1884 年から 1996 年まで 100 年以上続いた「寄宿学校制度」に根ざしているさまざまな問題を抱えている。

19 世紀末、政府は、先住民に対する法的、経済的援助を軽減し、先住民の土地や資源を支配できるようにするために寄宿学校制度の実施を開始した。15 万人以上の先住民の子供達を親元から離し、教会が運営する寄宿学校へ入れ、子供たちが生まれ育った言葉、文化、宗教を禁じ、英語とキリスト教を強要した。「文化的ジェノサイド」と呼ばれるこの寄宿学校制度は、霜鳥も言及するように、まさにグギの言う「文化の爆弾」そのものであ

る。グギは自著 *Decolonizing the Mind* のなかで、植民地にもたらされる最大の悲劇は、文化にたいする植民地化、すなわち、「文化の爆弾」だと説明する。グギは、経済的および政治的な植民地化は、それと並行して押し進められる文化の植民地化なしでは成し得ないと説明する。宗主国の言葉で教育することで、植民地の人々は母国語ではなく、習得した宗主国の言葉で世界を認識するようになる。言葉を習得するということは、その言語に内抱されたヨーロッパ中心主義的な世界観を習得するということ、また、そのレンズを通して自分たちを評価するよう強要するものである。つまり、先住民よりも白人のほうが優れているという白人優位の価値観に根付いた言葉で、自己を評価するようになるということだ。寄宿学校制度も、白人優位の価値観の前提のもと、「子供の中のインディアンを殺す」ことを目的とし、先住民の自尊心への徹底的なダメージを与えることになる。先住民の伝統文化や世界観が恥ずべきものだと教育され、母語を失った子供達が卒業後コミュニティに戻ると、親や親戚とのコミュニケーションすらとれない。一度切断された文化、コミュニティは寄宿学校制度が終わった後にもとに戻ることは決してなく、先に挙げたような先住民が現在抱える問題が示すようにさまざまな形で尾を引くことになったのだ。

イーデン・ロビンソンの『モンキー・ビーチ』は、主人公リサが弟ジミーの失踪の真相を探るミステリー小説であるが、そのプロセスにはこの「文化の爆弾」によって引き裂かれたハイダ族コミュニティが今も引き続き抱えるさまざまな問題や人間模様が描き出されている。本研究ではこの作品が「死者について語る」物語、主人公が「死者」の世界に旅する物語、そして死者の記憶を引き継ぐ物語であることを示し、それが、過去に何が起こったのか、ではなく、過去が現在において想起される、その「想起の行為が遂行される現在」(安川 297) に焦点が当てられることを指摘した。「死者について語る」ことによって、過去が実際の犠牲者、被害者の記憶で終わるものではなく、そのつどの現在に繋がっていること、そしてそのつどの現在において想起する行為は同時に癒しを求める行為でも有りうることを示した。

総合評価

本研究は 21 世紀カナダ西海岸のマイノリティ文学研究が、従来の伝統的移民物語とどう異なるかという歴史的視点を重視しながらも、カナダ西海岸という空間をどのようにマッピングしているかを分析することで、従来のマイノリティ文学研究にはみられなかった空間的視座（ロケーション）と共時的視座を導入することに意義を示した。「多文化主義」が差別に関する議論に与えた影響を踏まえながらカナダ西海岸特有の文学的動向

を通時的、共時的視点から考察した研究は他にあまり見られない。1970年以降注目を浴びてきたマイノリティ文学研究は、エスニック集団ごとに検討するものであったが、本研究は、カナダ西海岸地域で活躍するエスニック背景の異なる作家による作品を「多文化主義」、「人種主義」、「植民地主義」を切り口として比較考察したことで、マイノリティ文学研究にしばしば欠如している共時的でマクロな視点を補完できたといえる。

カナダ文学研究は今もなおカナダ東部のトロントを中心に発展し続けているが、本研究では見過ごされがちなカナダ西海岸文学に焦点を当てて考察した。カナダ西海岸の歴史のおよび社会的状況は、カナダ東部とは極めて異なるため、本研究はこれまでのカナダマイノリティ文学研究に欠如していたロケーション（時代と場所）を考慮した視点に加えて、カナダ文学の多様性を補完するものとなった。今回取り上げたウェイド・コンプトン、ラリッサ・ライ、マドレン・ティエン、イーデン・ロビンソンによる作品は、カナダ西海岸では非常に注目されているにもかかわらず、その作品研究は充分行われておらず、カナダ文学研究のみならず、黒人研究、アジア系文学研究に貢献するものとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件)

(1) 戸田 由紀子

『我々』と『彼ら』は存在しない：マドレン・ティエンの『境界線の犬』における「他者」、『カナダ文学研究』第23号、pp. 59-72、2016年3月、<査読有り>

(2) 戸田 由紀子

人種主義に抵抗する言葉を求めて—ブリティッシュコロンビア州黒人作家ウェイド・コンプトンの『パフォーマンズの連帯』、『黒人研究』84号、pp. 35-45、2015年3月、<査読有り>

(3) 戸田 由紀子

ラリッサ・ライの『ソルトフィッシュガール』と多和田葉子の『犬婿入り』における「変身」と「匂い」、『カナダ文学研究』第22号、pp. 49-64、2015年3月、<査読有り>

〔学会発表〕(計 6 件)

(1) 戸田 由紀子

「死者の語る物語—イーデン・ロビンソンの『モンキー・ビーチ』」平成28年12月3日(土)、日本比較文学会中部支部大会、名古屋大学文系総合館カンファレンスホール、シンポジウム「戦争(争い)における記憶と忘却のナラティブ—和解に向けて」

(2) 戸田 由紀子 マレーシアサイズ大学、ペナン、マレーシア、平成28年3月14日、“History, Myth, and Folklore in Contemporary Canadian and Japanese Female Fiction” <招待講演>

(3) 戸田 由紀子「カナダの多文化主義論争とマイノリティ文学の動向—Madeleine Thien の *Dogs at the Perimeter*」平成27年4月26日(日)、日本アメリカ文学会中部支部大会、名城大学名駅サテライト「MSAT」シンポジウム「カナダ文学の『今』」、名城大学名駅サテライト

(4) 戸田 由紀子「21世紀カナダ西海岸マイノリティ文学における Anti-Racism Politics」平成26年9月20日(土)、日本アメリカ文学会中部支部9月例会、椋山女子大学国際コミュニケーション学部508室

(5) 戸田 由紀子 “Touch, Smell, and Transformation in Larissa Lai's *Salt Fish Girl* and Yoko Tawada's *The Bridegroom Was a Dog*”平成26年9月 カルガリー大学英文学科、<招待講演>

(6) 戸田 由紀子「現代カナダ西海岸文学と多文化主義」平成26年6月14日(土)、第32回日本カナダ文学会年次研究大会、中京大学

〔図書〕(計 2 件)

(1) 戸田 由紀子共訳『ケンブリッジ版—カナダ文学史』、彩流社、2016年8月、第4部・18章、pp404-426.

(2) 戸田 由紀子「バラとセクシュアリティ—『スーラ』とテネシー・ウィリアムズの『バラの刺青』」、『新たなトニ・モリスン—その小説世界を拓く』、金星堂、2017年3月、pp25-38.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸田 由紀子 (TODA YUKIKO)

椋山女子大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：40367636

(4) 研究協力者

- ・ カルガリー大学准教授 Larissa Lai
- ・ 作家 Hiromi Goto
- ・ サイモンフレーザー大学名誉教授 Roy Miki
- ・ ブリティッシュコロンビア大学准教授 Christopher Rea
- ・ サイモンフレーザー大学准教授 Kirsten McAllister